

二〇二四年八月二日

花火師の中洲に躍る影法師
飛び石の歩幅に合はぬ日の盛り
似顔絵師涼しき眼より描き初む
石庭の岩を撫でゆく風涼し

智恵子
幸子
よし女
あひる

二〇二四年八月一日

傾ぎたる志士の墓碑より蟻出ずる
通勤のイヤホン族に蝉しぐれ
大雷雨天の水甕割れしごと
水撒けばどこにいたのか川蜻蛉
飛び石の濡れては乾く川涼し

よし女
康子
むべ
明日香
かえる

二〇二四年七月三二日

狛犬の小鼻膨らむやに大暑
路地親し風船葛の青簾
背の伸びし青田を撫でて風渡る
橋脚を呑むぞと疾る出水かな

よし女
澄子
かえる
むべ

二〇二四年七月三〇日

日傘さしても避けられぬ照り返し
山の風運んで来たる赤蜻蛉
襖絵の涼し蓮池展けけり

ふさこ
澄子
せいじ

二〇二四年七月二九日

立ち呑みの人垣にさす西日かな
迷子猫の手書きポスター炎天下
告げる事あれやこれやと墓洗ふ

澄子
なつき
もとこ

二〇二四年七月二八日

大天井涼し双龍描きたる
水遊び父川下に仁王立
バスのごと一両電車行く青田

せいじ
康子
みきえ

二〇二四年七月二七日

風鎮は父の形見や夏座敷
先を行く妻の振り真似盆踊
揺らめける蓮の葉裏に水陽炎
ペランダは特等席や遠花火
古町の蓑まばゆき夕立後

澄子
うつき
康子
こすもす
かえる

毎日句会みのる選・二〇二四年八月四日